

Fiber Science and Textile Engineering

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00009398

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



Fiber Science と Textile Engineering
Fiber Science and Textile Engineering

喜成 年泰

過日、「繊維と工業」編集委員長の土田 亮 (岐阜大学)先生から「時評」の原稿執筆依頼を受けました。たいへん名誉なことだと思いう一方、「縁の下の力持ち」的なシゴトの方が好きなので、目立つ役割はどなたかに代わっていただけるように行動してきたつもりです。この執筆も「黙っていたら何とか通り過ぎて行ってくれないかしら？」くらいに思っていました。日本繊維機械学会の会長を拝命している間は「縁の下」だけではいけないとハラを括り、居心地の悪いお役目をお引き受けすることにしました。

繊維学会の会員諸兄はご存知の通り、わが国には繊維関連の一般社団法人が3法人存在し、繊維産業界からは「一緒にやって欲しい」との要望が折々に聞こえてきています。また、3学会とも年次大会や総会が5～6月の短期間に集中し、研究分野として重なる部分が多く、研究者自身からも「何とかならないの？」とのご意見を伺うこともしばしばです。しかし、いざ法人を運営すべき立場に立ってみて、現在の一般社団法人の運営諸規則に照らし合わせると、総会は5月末から6月に開催する他はなく、総会と年次大会を切り離す体力のない学会は、6月に年次大会を開催するしかないようです。3学会の会長が集まって意見交換する機会が定例化してきましたので、「何とかする方法」を模索していただきたいと思います。ただし単純に「3つを1つに」してしまったら、決して1つの学会に3倍の力が結集されることがないのは、「何とかならないの？」と言っている研究者自身がイチバン理解している（アクティビティが単純に落ちるだけ）と思います。当面は「対外的（対海外や対行政）には協力し、それぞれの強みを生かす」を基本として、活動していくことになるだろうと考えています。

以下に「それぞれの強みを生かす」について日頃考えていることをつぶやきます。大学院修士課程修了後の社会人1年生から繊維学会に入会し、30ウン年間、2年に1度くらいは年次大会に参加している（過去数年は年次大会・秋研はほぼ皆出席）、そこそこマジメに活動している1学会員の立場としてのつぶやきです。

繊維学会は英文名を The Society of Fiber Science and Technology, Japan といい、現在 *Seni-Gakkaishi* と標記している論文誌を来年1月号から *Journal of Fiber Science and Technology* と改称するとお聞きしています。一方、日本繊維機械学会の英文名は *The Textile Machinery Society of Japan* であり、論文誌は2006年1月から独立させ、*Journal of Textile Engineering* と称するようになりました。日本繊維製品消費科学会も英文名称は *The Japan Research Association for Textile End-Uses* です。繊維とか繊維機械とか繊維製品とか書くと、繊維機械や繊維製品は繊維の部分集合のように見えます。また、*Textile Engineering* や *Textile Science* は *Fiber Science* の部分集合のようにも見えます。（事実、小生の活動するフィールドの1つは繊維学会の中のテキスタイル科学部門です。）

それでは *Polymer Science* と *Fiber Science* の違いは何でしょうか？私は高分子科学（化学？どちらであっても）は門外漢なのでその違いはわかりません。しかし、糸や布が高分子材料から作られている（近年それ以外がとて多くなってきたので、敢え

て注釈しました)として、糸や布は細くて長い高分子材料と「空気」との混合物だと理解しています。高分子材料の密度は空気の1,000倍程度以上ですから、Textileは質量の観点から見ればほとんどPolymeric Fiberですが、体積から見れば、逆に「ほとんど空気」です。空気の質量は非常に小さいので、「高分子材料+空気」の「空気」の部分をスキマと呼ぶ人も大勢います。「隙間=何もない」ならばFiber Science=Polymer Scienceであって、高分子科学がわかれば繊維工学は不要となります?いえいえ!繊維学会のTextile Science部門には繊維と繊維の隙間(空気)を研究している研究者が大勢いらっしゃいます。テキスタイルという言葉を持ち出してくると、繊維と繊維の間の空気の重要性を意識しているように思われます。そういう観点から、平井前会長や鞠谷会長は(Fiber ScienceがPolymer Scienceだけになってしまわないために?)テキスタイルという言葉もFiber Scienceと同様にとても大切にしているように思われます。

「対外的には協力し、それぞれの強みを生かしつつ」日本の繊維工学・繊維産業のアクティビティを刺激してまいりましょう。